

紅野芳雄著「考古小録」にみる考古資料収集家

合田 茂伸

西宮市立郷土資料館館長

1 紅野芳雄の稿本「考古小録」3冊と『考古小録』

紅野芳雄（このよしお：明治26[1893]年—昭和13[1938]年）は、のちに西宮町長についた紅野太郎の長男として西宮に生まれ、明治44年茨木中学校を卒業後、浪速銀行西宮支店に勤務、大正8年から昭和13年まで酒造業（のちの日本盛株式会社）の経営にあたった（図1）。大正6年4月22日から昭和13年4月20日まで、紅野芳雄24歳から45歳までの遺跡踏査活動や、考古学に関する覚え書きなどを連綿と記録しつづけたノートが稿本「考古小録」である（図2）。ノートは縦罫・B5版の全3冊で、インクで記入されている。このノートを、紅野芳雄没後の、昭和15年、紅野芳雄、吉井良尚氏（西宮神社神職・歴史家）、田澤金吾氏（後掲）らが興した後一時中断していた西宮史談会の復活に際し、田岡香逸氏が中心となって一冊の本にまとめたものが、『紅野芳雄遺著 考古小録』である。なお、この刊本『考古小録』は部分的に稿本「考古小録」とはことになっており、編集にあたった田岡香逸氏が作成した巻末の「西宮付近遺跡図」ともあわせ、同書は「田岡香逸校訂」とされるべき内容となっている。稿本は、西宮市教育委員会が文化財指定に際して全ページを影印した報告書〔森下2017〕を参照されたい。また、『考古小録』は印刷部数200部の少数ながら、関西地方の主要図書館には架蔵されている。

『考古小録』からみた紅野芳雄の活動は、ノートと採集された考古資料との対照が可能な点、西摂地方一帯の都市開発がいちじるしくなる直前の時期の遺跡の分布状況を記録した点、今日しられる同地域の重要な遺跡を発見している点で重要である。

「考古小録」全3冊およびその姉妹版というべき「考古図譜」、「考古雑録」（図3）には刊本『考古小録』に割愛されているおおくの挿図がある。それらは、遺存する採集遺物との照合が可能な原寸大の図や、遺物の散布状況から遺跡の範囲が推定できる略地図など、「考古小録」のさらなる理解と西摂地方の考古学研究に不可欠である。

こうした紅野芳雄の考古学への情熱や「考古小録」の位置づけは、辰馬悦蔵⁽¹⁾がよせた『考古小録』の跋文にあらわされている。



図1 紅野芳雄近影

「本書は通覧して誰しも先ず気付くのは、故人が上代の遺跡遺物の探究に非常に熱心であったことであらう。従来知られてゐるこの辺の多くの遺跡に度度と足を運ばれたのは申すまでもなく、新聞紙上などに新しい発見の記事でも載ると早速現地を踏査したことも屢であつて、甚だしいのは朝刊ならばその日に、夕刊ならば翌日にといふ風なものも珍しくなかつたらしい。尚西宮を中心として山野を跋涉し、今までほとんど知られてゐなかつたこの地方の石器時代の遺跡を数多く発見し又、古墳などを調査しときには発掘などもせられている。石器時代の遺跡の如きあまりにもその数が多いので宛もあらゆる場所がすべて遺跡であるかのごとくにさへとられる位だ。かくしてこれらの得られた成果を、直ちに巧みな挿図を付した簡明な日記体を以て記したのが本書の主要な部分である。これ等の記事に載っている遺跡の多くは君自ら親しくその地を踏んだものであり、遺物の多くは君自ら採集したものであり、しかも記されたのは調査、採集の直後である。則ち所謂一等史料に他ならない。掲載されてゐる遺跡や遺物の地域・種類・数量などが左程広くも多くもなく、記述また簡単に過ぎないけれど、学的価値の存するのはこの点にありと思われる。殊に日一日と遺跡の湮滅に歸し、遺物の散佚する現今当地方の如きに於いては、本手記の記事によってのみ独りありしを偲び得るものすら乏しくはない。今日既に然り、況んや明日をや。本書は少くも西宮を中心とする地方の上代の考古学的研究をなさんと志す人人にとっては、よい手引書となり或は昔談りをして呉れるものといふべきである。」

紅野芳雄は昭和13年4月25日になくなっているが、「考古小録」にしるされた最後の踏査記録は昭和13年4月20日で、22日に執筆されたものという。石器は、百貨店商品券用の桐箱に厚紙と綿でつくったマットをしつらえ、糸でしばりつけて保管し、土器は部屋のガラスケースに陳列していたという。この石器保管ケースは奥様の手製であった。採集遺物の点数は千点に達するほどであったという（「考古小録」では1360点）。昭和20年の空襲ののち、石器及び金属器の一部のみが西宮市鞍掛町の自宅焼け跡からひろいだされた。土器はそのときにすべてうしなわれた。ただ、「考古小録」ほか数冊のノートと日記は疎開していたため焼失をまぬがれたという。



図2 稿本「考古小録」全3冊



図3 「考古雑録」及び「考古図譜」

それら焼失をまぬがれた「考古小録」などのノートと遺物は、ご遺族から西宮市立郷土資料館に寄贈され、平成22年に西宮市指定有形文化財（考古資料、名称「考古小録」及び関係品）に指定されている。指定文化財となった「関係品」の大部分は、氏が採集した石器である。指定対象のうちわけは、稿本「考古小録」第1冊、第2冊、第3冊、稿本「考古図譜」、稿本「考古雑録」、刊本『考古小録』、日記（3点）、採集遺物357点である。

2 紅野芳雄の本山考古室見学記

紅野芳雄は、遺跡の踏査や遺物の採集とその記録に情熱をかたむけたが、各地の博物館や博覧会を見学したり、所属した西宮史談会主催の考古博覧会や武庫地方郷土史料展覧会などへ所蔵品の出品をしたりもしている。

大正6年に宝塚新温泉でひらかれた宮川氏所蔵加茂遺跡発見石器土器の展覧会、大正8年11月30日奈良帝室博物館、大正9年2月12日、同13日東京帝室博物館の見学記録などがあり、昭和7年10月1日には、濱寺農業博物館内の本山考古室の見学記録がある。『考古小録』では割愛されているが、見学時にはおおくの遺物のスケッチをのこしている。本山考古室の遺物は、いうまでもなく、現関西大学博物館の核コレクションである「本山考古資料」へとひきつがれたものである。

「考古小録 第3冊」に、「昭和7年10月1日 濱寺農業博物館内の本山考古室を見る 陳列品中の田沢氏旧蔵大社村柏堂。越木岩下新田。越水丘陵。甲東村甲山東麓良元村宝塚ウイヤマ。発見の石鏃其の他あり 特に目立ちたるものをスケッチす」と記して、大社村越木岩下新田の石鏃、

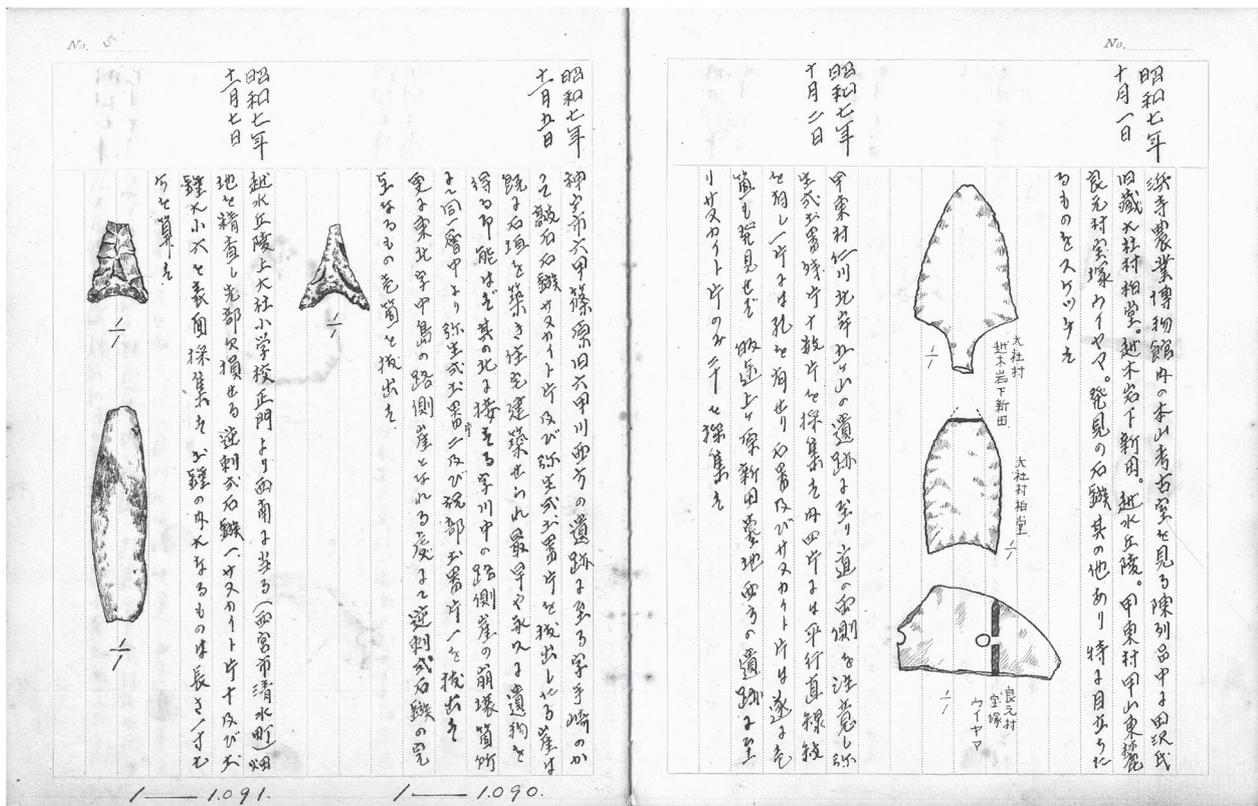


図4 昭和7年10月1日（「考古小録 第3冊」）

大社村柏堂の石鏃、良元村宝塚ウイヤマの石庖丁をスケッチしている。いずれも1/1とある(図4)。このうち、越木岩下新田出土石鏃が、現在の関西大学博物館に伝蔵されており、紅野芳雄のスケッチした石鏃と同定することができる。陳列はどのような状況であったのかはわからないが、一目で同定できるほど石器の特徴をとらえており、独学ではあったろうが、石器の特徴を抽象化してえがくことができる程度に、遺物の観察とスケッチの技量を有している。また、文中の田沢氏は、田澤金吾氏⁽²⁾のことで氏の採集した遺物は現京都大学総合博物館などにも伝蔵されている。

紅野芳雄ら当時の好古家は、田澤金吾氏ら同好家や古物商とのあいだで、石器や土器、埴輪の交換、売買をよくおこなっており、「考古小録」にもその記録がみえる。

この本山考古室の石鏃と紅野芳雄のスケッチがのこされた「考古小録」第3冊は、1998年に開催された西宮市立郷土資料館第13回特別展示「紅野芳雄と「考古小録」—西宮考古学のパイオニア—」において同じ展示ケースに並べられ、66年ぶりの再開をはたした[合田2018]。

3 紅野芳雄の遺物収集活動

紅野芳雄の遺跡踏査による遺物採集の側面については、かつて展示図録において遺跡ごとにまとめたことがあり[合田1998]、また最近、森下真企氏も再精査をこころみている[森下2017]ので、ここでは、遺物収集家としての側面をしるしておく。『考古小録』から日をおってぬきだし、適宜「考古小録」よりおぎなう。漢字はできるだけ常用漢字におきかえ、数字はアラビア数字とした。(括弧内)は筆者の補記である。

大正6年9月8、9日 宝塚新温泉にて川辺郡加茂宮川氏所蔵加茂遺跡発見石器土器の展覧会開催。(現川西市に所在する宮川石器館をさす)

大正7年5月18日 上野国新田郡世良田村大字世良田発掘埴輪土偶男子武装(三分ノ一大)を大阪島津製作所支店にて購入す。価2円50銭也。(世良田は、現太田市世良田町の下諏訪遺跡や二体地蔵塚古墳などかつて世良田四十八塚などといわれた古墳群。また、島津製作所は後出(大正9年2月27日)するが、いずれも遺物模型の入手であろう。)

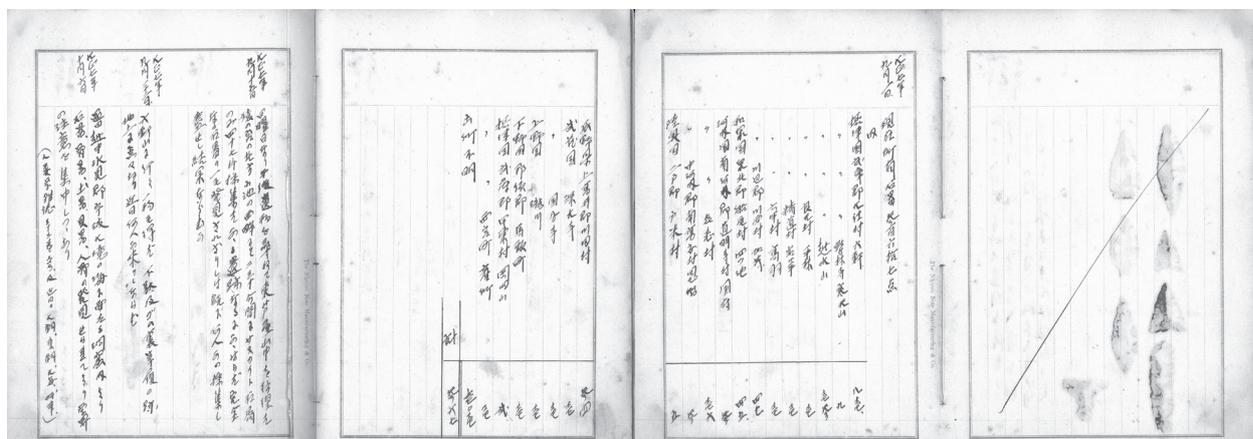


図5 大正7年9月1日(「考古小録 第1冊」)

大正7年9月1日 現在所有石器 367点(以下に遺跡名と点数を列記している(図5)。以降、不定期ではあるが、4月1日と9月1日に、所有遺物数の記入があり、定期的に遺物を点検していたのではないかとみられる。また、昭和3年12月26日の「考古小録」からは、ノート欄外下に、入手した遺物の数と累計の遺物の数がメモされるようになる(図6。)

大正7年12月24日 錘石1個購入。価30銭。

大正8年6月8日 西宮神社社務所に西宮史談会第2回考古資料展覧会を開催す。吾が出陳物左の如し。

大正8年6月15日 磨製石斧1個購入す。価10銭。

大正8年6月21日 石器購入。(加茂遺跡、国府遺跡などの石器24点を列記)以上10円にて田澤氏より購入す。「考古小録」にみる田澤金吾氏の初出である。考古史料展覧会の直後であることから、展覧会に際して田澤金吾氏らとの石器などの交換がおこなわれたものとみられる。

大正8年7月16日 神田孝平著日本太古石器考(明治19年4月発行)大阪にて求む。(このほか、考古学に関連する図書をたびたび購入しており、「考古小録」にはその一覧を随時記録している。)

大正8年8月21日 大阪平野町夜店に行き磨製石器1本1円19銭、江見水蔭著明治40年発行「地底探検記」古本にて20銭にて求む。

大正8年11月30日 奈良に行き博物館に入る。陳列品旧の如し。古物商にて石匙6個60銭にて求む。

大正9年2月12日 東京帝室博物館にて北アメリカ古代土器3点、キプロス古代土器1点、豊前田川郡糸田村石剣1点、安芸国豊田郡伊多名部山発見環状提瓶1点、肥後八代郡津野村発見埴輪土偶1点の写生をなす。

大正9年2月13日 東京帝室博物館にて唐代古墳発見女土偶(紀元1278—1566)1点、北アメリカ古代土器2点の写生をなす。

大正9年2月27日 京都に遊び島津製作所にて埴輪土偶模型2点を求む。一、女子、実物二分之一大、下野国河内郡雀宮村菖蒲塚発見のもの、価1・50。一、武装男子、上野国勢多郡前橋新町裏、価2・00。

大正9年5月20日 奈良に遊び東大寺の一部を写生し、一古物商にて石棒頭部残片1個1円40銭にて買ひ求む。

大正9年10月2日 秋風そぞろに吹き百舌鳥の声すみ渡りたる空にけたたましく聞ゆ。田澤君と岡田山石器時代遺跡に行く。石屑40有余片を採集せるのみ。(田澤金吾氏とは、ともに遺跡踏査にもでかけたことがわかる。)

大正9年11月7日 現在所有古墳時代遺物1百5点(として、以下に種類と出土地などを列記) 6、7両日西宮神社社務所に開催の武庫

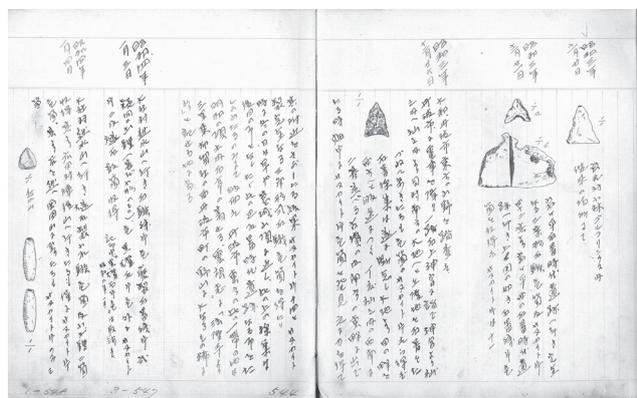


図6 昭和3年12月26日(「考古小録 第2冊」)

地方郷土史料展覧会に左記物品出陳す。(以下に、「石器時代の部」、「古墳時代の部」とわけて、出陳目録を列記) 武庫郡史料展覧会に出品の津門及び打出出土の銅鐸を拓影す。

大正10年3月15日 左記遺物田澤氏より譲り受く。<但し本箱と交換>(六軒山遺跡、国府遺跡、加茂遺跡の石器など71点を列記)

大正10年4月1日 現在所有石器左の如し。出所明白 376点、出所不明 130点 合計506点。

大正10年6月25日 甲東村神呪小島氏を訪問、一古墳発掘の小平瓶1個の寄贈を受く。(甲東村は、現西宮市甲東地域。同地域上ヶ原には横穴式石室古墳が多数所在した。)

大正10年6月30日 大阪田村氏来訪、岡本発掘雲珠(大形ノ分1個)と石鈷1個と交換す。

大正10年7月30日 大阪田村氏来訪、岡本発掘杏葉1個及び同小形雲珠1個と埴輪土偶首部1個と交換し、石環1個2円にて購入す。(遺物収集家が自宅に訪ねてきていることがわかる。)

大正14年11月22日 奈良及び薬師寺に行く。薬師寺にて塔擦拓本を求む。(塔擦は、薬師寺東塔の相輪支柱に刻まれたいわゆる「東塔擦銘」。紅野芳雄の古代史への関心をうかがえる)

大正15年10月4日 豫ねて御来朝の瑞典皇太子グスタフ・アドルフ殿下本日神戸市へ御成り、三越楼上の考古資料展覧会を台覧あり。奉迎送及び遺物台覧の光栄に浴す。(続けて、台覧遺物として石器を主とする出陳資料132点を列記。『考古小録』ではそれら遺物の写真を図版で掲載している。)

大正15年12月4日 午後1時急に思い立ち山崎と寒天山石器時代遺跡に行く。

昭和2年7月24日 山崎が和泉国泉北郡信太山陸軍演習地にて、大形石鏃の残片と思われるもの1個取得し持参す。

昭和2年9月1日 現在所蔵石器左の如し。(として出土地別の石器を列記している。合計459点。西宮近在のものがおおいが、前出の信太山や河内日下、恩智、国府、貴志、狭山、遠方では信濃のものがふくまれる。)

昭和2年9月24日 山崎が和泉国泉北郡久世村小坂にて、一部欠損せる三葉形石鏃1個、信太山にて変形の石鏃と思われるもの1個取得し持参す。信太山の分は或は石鏃に非ざるやも知れず。実に珍品なり。

昭和4年1月20日 十何年振りにて川辺郡川西村上加茂の石器時代遺跡に至る。此の地は大正3年頃、石器時代の一大遺跡として人類学雑誌上に発表せられてより、採集に来る者甚多かりし故…。(紅野芳雄自身をふくめて、当時の遺物採集趣味の一端をすることができる。この日以降、加茂遺跡への踏査が増加する。)

昭和4年4月16日 本日の考古学雑誌(19ノ4)に六甲村篠原に於いて、有紋弥生式土器の発見せられたる報告あり。発見地点及び伴出遺物等明記なけれども午後徒然のまま篠原村に至る。今村の南畔は耕地整理中にて…弥生式土器1個を得。(としるして資料紹介文を目にし、直後に遺跡をおとずれて採集をおこなっている。このあと、4月16日、4月23日にも篠原遺跡をおとずれて発掘し、弥生土器を採集している。また、意図せずして、「石器類は相変わらず破片すらなく」と重要な指摘をしている点は、作為なく遺跡の遺物を抽出する作業となったことをしめしており、紅野芳雄のような現地採集による遺物についても、考古学的には一定の評価があたえられる拠であ

ろう。記載の報文は直良信夫氏の報告〔直良 1929〕である。）

昭和4年9月26日 香野蔵雄より南洋サイパン島にて自身採集したる、磨製石斧2、貝斧1を貰受く。

昭和4年10月19日 今朝の大毎紙上に、大阪市住吉区桑津の南方に石器時代遺跡発見せられ、石斧石匙等出土したる記事あり。よりにて直に桑津に向ふ。大鐵電車を北田辺に降り北行約4町にして桑津に達す。遺跡は村落の南端に接し方34町に亘り、西方上町台地丘陵の將に沖積層に没せんとする處にありて、高度海拔5米乃至7米半を算す。今此の一带は耕地整理中にて、縦横に新道敷設のため地表を1尺乃至数尺掘り下げつつありて、遺物は此の掘下げ中地下12尺の處より出土し処々点々散在す。約2時間の精査にて…。(篠原遺跡のときと同様に、遺跡発見の報を聞いてすぐに現地へ遺物採集にむかったことがわかる。このころは遺跡の現地踏査による遺物収集が熱を帯びており、桑津遺跡の後、10月27日には大歳山石器時代遺跡(大歳山遺跡)、11月14日には新沢村東常門遺跡(新沢一遺跡)、唐古遺跡をおとずれている。単独行かどうか不明であるが、いずれの遺跡も雑誌で報告されたり新聞紙上に報じられたりした著名遺跡であり、おそらく紅野芳雄は雑誌や新聞の情報を利用して収集に出かけたのであろう。)

昭和5年4月1日 現在所蔵石器内訳(合計842点の石器の一覧をしるしている。)

昭和6年7月14日 大社村岡田山の石器時代遺跡に至り三葉形式石鏃2個サヌカイト片22個を採集す。(この日の記事の欄外下に、2—1001として、岡田山遺跡の石鏃2点を追加して所有石器の合計が千点をこえたことがわかる。)

昭和6年10月22日 大阪市東成区森小路の石器時代遺跡に至る。…土器片の散在せるを見るのみにて何者も得ず。幸千林町の蒐集家比留間氏の来るに会し、同氏宅に至り此地発見の石器及び土器類を一覧し、且石鏃1個及び有紋弥生式土器口辺部破片2個の寄贈を受く。(石器に関心が集中していることがうかがえるが、遺跡で同好の士にであってそのまま居宅にむかい遺物を閲覧して、石鏃などをもらいうけていることを記載している。昭和初期の考古遺物収集家同志が遺跡であらう、遺物をまえに興にいる様子が想像される。)

昭和7年5月22日 前田善一友人が精道村打出で阿保親王塚北畔にて発見せるものなりとて、サヌカイト製完全なる逆刺式石鏃1個を持参す。阿保親王塚北畔とのみにて発見地点不明なれど、墓の西北畔なるサヌカイト片散布地打出字地造の発見にあらざるかと思うはる。(友人がもちこんだ石器について、遺跡名を同定し、記録している。友人にはこの遺跡名を即答したのではないだろうか。西宮在住収集家の面目躍如である。)

昭和7年10月1日 濱寺農業博物館内の本山考古室を見る。陳列品中に田澤氏旧蔵大社柏堂、越木岩新田、越水丘陵、甲東村甲山東麓、良元村宝塚ウイヤマ発見の石鏃其の他あり。(これは、冒頭に記した本山考古室を見学した記録である。『考古小録』には遺物をスケッチした文と、その図は割愛されている。展示に田澤金吾旧蔵と表示されているとはかんがえにくいので、田澤氏に同行しての見学ではなかったか。)

昭和9年9月23日 西宮神社御造営竣成記念郷土史料展覧会(23、4両日於西宮神社社務所)へ西宮市内発見の左記石器類を出陳す。(出陳数は合計147点、7箱におよんでいる。)

4 考古遺物収集家としての紅野芳雄

先にしるしたように、大正7年9月1日から昭和5年4月1日まで、毎年きまった時期（4月1日と9月1日）に収集品全体の棚卸しのような点検をおこなっていたことが推察され、昭和3年12月26日からは、「考古小録」の欄外下に544点にはじまる、所有する石器の点数を日ごとに記録し、昭和13年4月13日に石錐1点を追加して1360点でおわっている。「考古小録」の記載は4月20日で最後であるが、その日の記録では越水山遺跡でのサヌカイト片のみの採集であるため、石器点数の記載はない。

田澤金吾氏のほか、「考古小録」に登場する収集家や入手場所は、つぎのとおりである。

宮川石器館 宮川雄逸氏（朝日新聞社勤務）が昭和11年に私宅を改造し、公開。

島津製作所 明治24年に島津源蔵が標本類の製作を開始し、明治28年に島津製作所内に標本部設置、昭和19年に標本部が閉鎖されたのち、昭和23年に株式会社島津製作所の標本部を継承し京都科学標本株式会社が設立されている。京都科学標本株式会社は、その後昭和63年に京都科学と社名を変更している。京都科学は、博物館の複製展示品製作でもしられる。この「考古小録」では埴輪模型を2度購入している。当時は木屋町の社屋で、教育用標本が一般向けに販売されていたことをうかがわせる。

西宮神社 西宮史談会を共に興した吉井良尚は同社神職であり、ここにもしるされている西宮史談会考古資料展覧会や武庫地方郷土史料展覧会などが社務所で開催されている。吉井良尚との交友は、紅野芳雄が茨木中学校入学時に吉井氏が4年生で同中学校の寄宿舎で室をおなじくしたことに端を発する。吉井氏と紅野は中学校周辺の遺跡を踏査しており、それは「考古小録」での同地方の記載がすくなくないことの理由のひとつであろう。吉井氏と紅野、田澤金吾氏が大正4年に西宮史談会をおこしているが、紅野の踏査記録のかなりの部分が史談会メンバーとの同行ではないかともう。

大阪田村氏 大阪府国府遺跡、船橋遺跡などの遺物のコレクターでしられる田村淳正氏ではないか、と思われる。船橋遺跡出土遺物は現東京国立博物館の同氏コレクションとして収蔵、展示されている。

山崎、香野蔵雄、前田善一氏らは紅野の地元の友人ではないか。

辰馬悦蔵氏 辰馬悦蔵氏は「考古小録」には登場しないが、紅野芳雄とは高等小学校で同級であり、またおなじく酒造家であり、のちに西宮史談会再興のメンバーとなり、『紅野芳雄遺著 考古小録』の跋文をしるした。

踏査遺跡の場所もふくめて、時には東京帝室博物館にも足をのぼしていたことがわかるが、それらの情報源は、彼が遺物とともに収集につとめた考古学関係の書物や新聞、田澤金吾氏、吉井良尚氏、辰馬悦蔵氏らとのふかい親交のなかからもたらされた「考古情報」ともいべき知識や伝聞であり、さらに、近畿地方の遺物コレクターのネットワークのなかにもはいるこんでいたことがうかがえる。自家の酒造業の経営ののち、紅野家の本家にこわれてその酒造会社の支配人にむかえられている実業家でありながら、ときには遺跡を踏査し、ときには石器や土器の交換、売買でコレクショ

ンをふやし、また、子息安雄氏（関係資料の寄贈者）をともなって遺跡をあるき、奥様手製のマットに石器を固定して家内の陳列ケースに並べていた。そのような遺物収集の熱意は昭和13年4月25日になくなる直前までおとろえなかった。

「考古小録」に記された紅野芳雄の収集記録、本山考古室や田澤金吾氏との接触、辰馬悦蔵氏との交友は、大正から昭和初期における「考古」あるいは「好古」のありかたをリアルにつたえている。

註

(1) 辰馬悦蔵 1892—1980

「白鷹」醸造元・北辰馬家・辰馬悦蔵商店（現白鷹株式会社）の3代目。京都帝国大学で考古学を学び、卒業後酒蔵を営みながら考古学研究を続ける。現在の公益財団法人辰馬考古資料館（1976年設立）の銅鐸などの収蔵品の元となったコレクションをつくりあげた。

(2) 田澤金吾 1892—1952

文化財専門審議会工芸品部、考古民俗資料部会専門委員田澤金吾は、9月26日没した。享年59歳。明治25年1月12日兵庫県西宮市に生れ、兵庫県立工業学校を経て早稲田大学理工学科に入学、大正2年まで在学して退いた。同6年頃から考古学の研究に志し、同7年以来、和歌山県、内務省、東京帝国大学、文部省、国立博物館等の嘱託として史蹟名勝、重要美術品の調査に従事した。昭和24年文部技官に任ぜられ、国立博物館調査課に勤務し、同25年文化財保護委員会事務局の保存部美術工芸品課に転じ、27年退官した。25年文化財専門審議会専門委員となった。著書に「楽浪」「鞍馬山経塚遺宝」「薩摩焼の研究」などがある。（東京文化財研究所HP>物故者記事 <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/8943.html>）

参考文献（著作年代順）

直良信夫 1929年「二、三彌生式土器の紋様について」『考古学雑誌』19-4 日本考古学会

末永雅雄編 1935年『富民協会農業博物館 本山考古室要録』岡書院

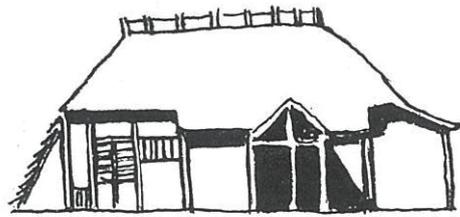
紅野芳雄 1940年『紅野芳雄遺著 考古小録』西宮史談会

合田茂伸 1998年『紅野芳雄「考古小録」～西宮考古学のパイオニア～西宮市立郷土資料館第13回特別展示案内図録～』西宮市立郷土資料館

合田茂伸 1998年「特別展「紅野芳雄『考古小録』—西宮考古学のパイオニア—」『西宮市立郷土資料館ニュース』第23号

森下真企 2017年『西宮市指定重要有形文化財<考古資料>「考古小録」及び関係品調査報告書』（西宮市文化財資料第64号）西宮市教育委員会

合田茂伸 2018年「本山考古室と紅野芳雄「考古小録」」『阡陵—関西大学博物館彙報—』No.76 関西大学博物館



家農の方地輕津

富民協会十年史挿絵